

ンの儀が終了したのち、行燈を解体後、出陣式を行った三差路にて裁許・若衆・OBが若衆が持っていた長提灯三本を中心に円になるよう並び、裁許長の全体総括、氏子代表（OB）の挨拶の後、全体のシャンシヤンの儀と同様の流れで行われる。終了するのは明け方となり、その後、新町にある飲食店「まる嘉」で打ち上げを行う。

### ⑦夜高行燈の解体

シャンシヤンの儀が終了すると、出陣式を行った三差路に戻り、解体作業を開始する（写真96）。台締め番線や縄はカッター・ノコギリで切る。また、組み立てと同様にまず芯木にロープを結び支えながら行燈を倒し、上から順に部材を取り外す。部材によって格納する場所は異なる。台棒は西源寺、吊物（表）・田楽は新町会館、心棒、横棒、吊物（裏）・台は曳山山蔵となっている。

### ⑧チビ・小・中行燈

新町は、子どもが少なく小行燈は練り廻さない。中行燈を小行燈として練り廻す。中行燈の意匠は大行燈と全く同じで、大行燈のミニバージョンという形態である。小行燈は、小学生から中学生まで参加できる。大行燈は高校生から参加できるが、引き合いには参加していない。

大行燈の曳き手は男性のみであるが、小行燈は町内の子ども（男女問わず）に加え、その母親も参加可能である。

### ⑨その他

祭りに関わる女性の役職、子どもの組織はない。

## 第四項 浦町

### （一）浦町の概要

浦町は、南砺市福野のやや北部に位置し、現在の住居表示では福野にあたり、行政区では二区と三区に該当する。二区は上浦町、三区が（下）浦町である。北は松原本町、西は二日町に接しており、夜高行事に関する町では、東は辰巳町、南東は御蔵町、南は上町、南西は横町に接している。なお、辰巳町は浦町に分家町とみなされており、夜高や曳山行事の運行で一部連携を図る部分がある。また、浦町の北に位置する松原本町は、本来福野神明社の氏子町ではないが、昭和五五年（一九八〇）から浦町の一員として小行燈を出している。当時の小学生以下の子どもたちにも行燈を曳かせようと、その父兄が浦町と他の町内において参加できるようにした。

令和六年（二〇二四）一二月の世帯数は一一七戸で、地区の大部分



97. 浦町会館



図 13. 浦町位置図

は住宅及び店舗である。昭和四五年（一九七〇）時の四〇パーセントと  
なっているが、それでも人口は七町のうち七津屋、横町に次いで三番目  
に多い。

行燈製作や会合の場所となるのは浦町会館（写真97）である。こ  
の場所は元々福野警察署であったが、井波警察署との合併に伴い移転し  
たので、平成二年（一九九〇）に行燈製作の場兼町内会館として建築さ  
れたものである。浦町会館の整備以前は、浦町の真宗寺院円成寺の境内  
および本堂を使用していた。

## （二）運営組織

夜高行事の運営は「浦町夜高保存会」、「浦町裁許」、「浦町若連中」が  
担う。

### ①浦町夜高保存会

#### 組織構成

浦町夜高保存会は、会長一人、副会長一人、参与二五人、事務局員三人、  
理事二二人、幹事二三人、監事二人、実行委員四人の総勢八一人で構成  
される（令和六年度）。役員は事務局案に基づいて年初めの公聴会終了  
後に行われる総会で承認を受ける。任期は二年で再任は妨げない。ただ  
し、会長は三区区長、副会長は二三区区長としているので、実質、会長、  
副会長の任期は二年である。

#### 役割

浦町夜高保存会は、夜高祭において浦町住民が先達より受け継いで  
きた伝統、精神、文化などを後世へ適切に伝承することを目的とする。

夜高行事に関する役員の役割は次のとおりである。

#### 会長

会を代表して夜高行燈の製作・練り廻しをするため裁許、若連中、構

成自治会等との連絡調整を行う。

#### 副会長

会長を補佐する。

#### 事務局員

会長の指示を受け、計画立案、資料作成などの事務全般、会計を担  
当する。

#### 監事

会計監査を行う。

#### 実行委員

当年度の夜高行事担当の裁許三人と若衆頭一人。

#### 運営経費

夜高行事運営の経費は、町内の徴収金、福野夜高祭連絡協議会から  
の助成金などを財源としている。

令和六年（二〇二四）の運営経費を見ると、支出は主に行燈の製作  
費二七八万円などである。

#### 会合・スケジュール

浦町の夜高行事に関する会合は浦町会館で開催される。

まず、二月初旬に、浦町裁許、浦町若衆、町内自治会役員、裁許〇  
Bで構成する公聴会が開催される。祭礼全般に関する決算・予算・内容  
等の承認を受ける。公聴会終了後、浦町夜高保存会の総会が開催される。

### ②浦町裁許

浦町裁許は、裁許長一人、裁許二人の三人で構成される。若いころ  
から行燈にたずさわり、若衆頭を経験している厄年（四二歳）前後の人  
の中から前年の裁許および裁許〇Bによって決められる。最終的には公  
聴会で承認されることが必要となる。任期は二年で、二年目の人が裁許

長となる場合が多い。なお、分家町である辰巳町から三人の裁許が選出され、内一人が代表裁許となる。浦町の三人と辰巳町裁許長一人の計四人が、対外的には浦町裁許四人となる。

裁許は、夜高行燈製作から練り廻しまでの全般にわたる責任者である。

#### 裁許長

夜高行燈の製作、練り廻しの全般にわたる総責任者である。

#### 裁許

裁許長を補佐し、運営に関する会計、計画作成、各種届出、資料の作成を行う。

#### ③浦町若衆

正式名称は「若連中」だが、一般的には「若衆」と書いて「ワカישユ」と呼ぶ。若衆は夜高行燈の製作と祭り当日の運行を担当する。一八歳から二五歳くらいまでの男性で構成される。若衆のリーダーは「若衆頭」と呼ばれる。若衆頭の選出は若衆の互選が基本だが、裁許や裁許OBなどの意見も参考にする。

もともと行燈の製作はほぼ若衆のみで担っていたが、現在では人数も減少しているので、若衆OB、裁許OB、町内の経験者等、町内総ぐるみで製作にあたっている。

#### 若衆頭

行燈の進行全体を指揮する。祭り当日「頭」との文字を染め抜いた法被を着用する。「頭」の法被は五着ある。

#### (三) 行事の現状

#### ①夜高行燈の製作

#### 製作工程

製作は例年二月末から開始する。平日と土曜の一九時過ぎから二時ごろまで行う。日曜日は休み。一〇人前後の若衆およびOBが参加する。また、他町へ出た人や浦町に縁のある町外の人など五、六人が参加することもある。

竹細工・電気の配線・紙貼り・蠟引き・色塗りなど、それぞれの担当者が分担して、全体で並行して作業をする。

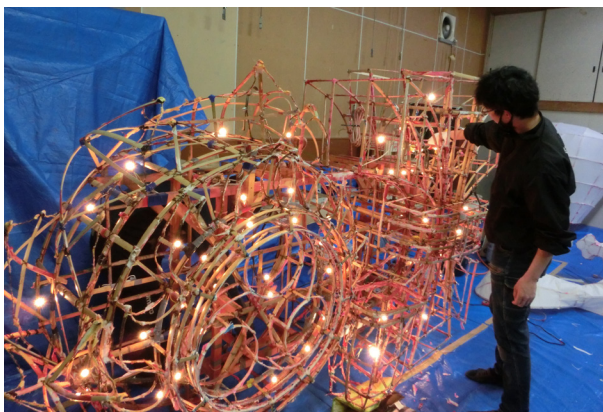
#### 竹細工

昨年の夜高行事終了後、行燈小屋の天井に吊り下げてあった行燈を降ろし、作業場となる浦町会館一階へ運搬する。そこで昨年の紙をきれいに剥がして、骨組だけにする。引き合いでゆがんだところ、壊れたところの骨組みを直す際、新たな意匠に基づき作り変えることもある(写真98)。

竹は、御蔵町の雅環境造形へ注文する。特別細いものは高岡江尻の



98. 竹細工（浦町）



99. 配線（浦町）

商店に注文する。かつては前年の年末に安居の山へ取りに行つて、円成寺の床下へ入れて乾燥させていたという。

浦町の山車は、大行燈は御所車、中行燈は宝船などであるが、いずれも形を出すのはベテランの一人で、若衆がその作業を補佐する。御所車の車輪の部分は毎年必ず壊れるので、新人の若衆の練習台となり、竹の曲げ方や番線の縛り方などを学ぶ。

竹細工の基本作業は、一、竹割を使用して、孟宗竹を割る、二、小刀で身をそぐ、三、小刀で節をならす、四、曲線が必要な部分を曲げるとなる。竹を曲げる方法は、お湯を沸かして湯に付ける、ろうそくの火・ストーブ・ドライヤー等で熱を加える、丸い形のコンパネに這わせて、バーナーで熱風をあてる等、様々であり常に試行錯誤している。

竹細工を行うときに、次の工程である紙貼りのことを考えて作業している。

#### 配線

紙貼りの前に配線を完了し、通電して断線や球切れがないか確認しておく(写真99)。電球がつかないものがあれば取り換える。全体がきれいに見えるように調整し、影になる部分は骨組みの竹を切ることがある。

毎年二人で担当する。後継のために三、四歳くらい年の離れた人を充てる。

#### 紙貼り

材料の紙は、五箇山和紙の里から購入している。和紙を切る時は、ハサミを用いず、水をつけた筆で線を引いて破く。糊は、以前は障子を貼る糊を使用していたが、現在は壁紙貼りの糊を第一交易(株)から購入している。糊が表面に出してしまうと蟻が付きにくくなるので注意する。

糊が乾いたら、霧吹きをしてそのままの状態を保つ。乾燥すれば和紙はピンと張る。紙貼りは四月の半ばまでに仕上げる。

#### 蟻引き

蟻引きは、型紙をあてて色鉛筆で線を引いた上を、蟻を付けた筆でなぞる(写真100)。ベテランは何もないところに直接蟻をつけた筆で線を書く。蟻は、常に電熱器やコンロで加熱して溶かしながら描く。

ある程度の絵心のある人でないと難しい作業なので、昭和三〇〜四〇年頃は蟻引きの担当は決まっていた。しかし現在は、新任の若衆からまっすぐな線を描ける人が蟻引きの作業担当となる。まず縁取りから始め、柵のような方形に直線のみを担当する者、ベテランの助手などをつとめ、徐々に高度な技能を学んでいく。蟻は木澤薬局から購入している。

#### 色塗り

浦町は紅入れとは言わず、色塗りと呼称する(写真101)。和紙に



100. 蟻引き(浦町)



101. 紅入れ(浦町)

絵を描くのは「絵具」ではなく、布を染める「染料」を使用する。基本色は赤、ボカ（桃色）、青竹、青、黄色、スカイブルーである。スカイブルーは浦町独自のもので、もと北国染工で買っていたが、生産中止となったので現在は木澤薬局から仕入れている。混ぜて作る色は、緑は青竹と黄色、オレンジはボカ（桃色）と黄色などである。

### 台締め

行燈の組立には大量の縄が必要である。現在は折橋商店から購入している。購入時の巻いたままの縄では使いにくいので、作業しやすいようにあらかじめ巻き直しておく必要がある。その作業を縄巻きと呼んでいる（写真102）。縄巻きは、四月初旬の日曜日に実施し、天気がよければ円成寺前の公道で行うが、近年は福野中学のピロティを使用している。ピロティから真向いの端まで、撚りを戻しながら縄をまっすぐに伸ばし、一・五メートルほどの長さに折り返した縄に片側から巻いていく。その量は何メートルと長さで言わず重さで表し、大行燈用は七・五キログラムを二二本用意する。縄をまく箇所が一八箇所あり、予備二本を含める。中行燈用は四キログラム、予備二本含め二二本。小行燈用に一〇尋<sup>ひろ</sup>を予備二本含め二二本用意する。

四月中旬の日曜日、全体裁許会当日の夜に浦町会館で中入りがある。台締め作業に先立って、台、台棒や横棒などを保管場所から作業場である円成寺境内へ移動しワイヤーで締める。台と台棒、横棒の位置決めは台締めの作業の中でも重要な工程である。ワイヤー締めは、ほぼ一日要する作業であり、台締め前の土日に実施する。

台締めは通常四月二十九日に実施する（写真103）。日程は回覧板等で周知する。通常円成寺境内で実施するが、令和五年（二〇二三）は雨天だったので日の出板金で行った。作業開始時は二〇数人だったが、

一九時三〇分ごろから四〇人前後になった。

作業は、OBと若衆が組み、縄の巻き方、化粧まわし、縛り目の処理の仕方などをOBが若衆に教えながら実施している。大・中・小三台の行燈はすべて並行して作業を進める。

台締めは、前に締めたワイヤーを隠すように縄を締めてゆく作業である。隠せないところは麻袋の切れ端をかぶせる。縄をつなぐときは見た目に配慮し裏側でつなぐ。縄はあらかじめ少々湿らせておく方がきちんと締めやすい。ハチマキ（何回か縦にまいた後、横に巻くこと）の際にはビニールテープで縄二本をほどけないようにまとめて行う。縄は常に木槌でたたいて締める。一人が声を掛けながら縄を引っ張り、もう一人が木槌でたたく。台締めに欠かせないのがシノという道具である。先端が尖った棒状の道具で、鉄線の結束や締め付けに使用される。最後の結びは男結びである。男結びができる人は限られている。



102. 縄巻き（浦町）



103. 台締め（浦町）

すべての作業が完了したのは二三時頃であった。その後浦町会館で慰労会が催された。

### 飾付、組立

組立は、通常五月一日の早朝五時から、円成寺付近の県道福野城端線で、わずかにカーブして少し道幅が広いところで行う。円成寺境内から台、浦町会館から山車などの部品を運ぶ。現在、組立には城栄重機のレッカーを使用する（写真104）。心木・田楽・傘鉾・蜻蛉と一緒に通した状態でレッカーで釣り上げて、台に心木を通す。地面の上に置いてある山車の上に一人、台の上に一人、それぞれ命綱を付けて上る。田楽の上に二人、控の綱二人、釣り上げ、穴を合わせて通す（写真105）。ここでレッカーの作業は終了。その後、若衆が御所車の車を付けた。六時三〇分ごろに終了した。



104. 行燈の組立（浦町）



105. 行燈の飾付（浦町）

作業は主に若衆、若衆OB、裁許、裁許OBの三〇人前後で行い、町

内のOBや区長などが見学していた。

レッカーは、昭和五八年（一九八三）ごろから使用するようになった。製作の予算

令和六年（二〇二四）の製作費は二七八万円であった。

### LEDの導入

浦町はLEDを使用していない。LEDは単価が高く、電球に比べ発色しすぎるといふ理由で、今後も使用する予定はない。浦町の行燈は蝋燭の明かりのようなきれいさを目指している。

### 職人の存在

行燈の製作には特に職人は関わっていない。

### ②夜高行燈の意匠

### 夜高行燈のデザイン

現在の行燈のデザインは、山車が御所車で、吊物が火炎太鼓と熨斗



106. 行燈の意匠（浦町）

である（写真106）。後ろの吊物の背面には風神雷神図が描かれている。中心の田楽の四面には、それぞれ「神光照天地」「御神燈」「浦町氏子」の文字が書かれ、残り一面に武者絵が描かれる。昭和五七年（一九九二）四月製作である。吊物は年によって図柄を変更することがあるが、最近では火炎太鼓と熨斗で定着している。山車はかつて花車や四十八歌仙がデザインされたこともあった。

### ③夜高太鼓、笛、夜高節

夜高太鼓と笛の練習は、令和五年（二〇二三）は四月一五日から始まった。時間は一九時三〇分からで、場所は屋内ゲートボール場である（写真107）。指導者は過去の太鼓競演会経験者の七〇代、五〇代後半の四人である。うち七〇代の男性は、夜高太鼓の第一人者となっている。参加者は子ども一〇人前後で女の子の方が多い。初心者はタイヤで練習している。高学年・中学年・低学年・兄弟など、それぞれペアを組んで練習している。

夜高節の練習は、令和五年は四月二三日九〜一〇時で、場所は浦町会館であった（写真108）。指導者は、裁許OBの中から歌の責任者一人と若衆から子ども担当者一人であった。参加者は子ども六人（小学三・四年生各一人、五・六年生各一人）とその父母四人である。

指導者が、福野町および夜高行燈の始まりなど歴史を教えたあと、夜高節の歌詞のプリントを配布し一緒に歌った。拍子木も叩いて、和気あいあいと進んだ。

### 子供夜高太鼓競演会

令和五年の子供夜高太鼓競演会は四月二十九日の一三時三〇分からアミューホールで行われた。小学生低学年の部、小学生高学年の部、中学生の部、そろい打ちの部に八人の子どもたちが参加し、中学生の二人

が夜高保存会長賞を受賞した。笛は高校生三人が参加した。

### ④夜高行燈の装束

若衆、裁許とも、股引、腹掛け、長い地下足袋に法被を着用する。若連中の中で、鯉口シャツを着用する者もいる。法被の背面には白抜き御幣に朱字の「祭」と染め抜かれている（写真109）。前面の両襟部には「浦町」の白抜き文字。裁許の三人は両襟に「裁許 浦町」との文字の法被を着て、腰帯を締める。若衆頭は両襟に「頭 浦町」の法被を着る。

裁許は昼間でも提灯を持つ。提灯の文字は「浦町 山車 裁許」とある（写真110）。もともと裁許とは曳山の裁許である。

若衆頭は拍子木を打つ。

法被、上着などは二年に一度注文を取って、整える。



107. 夜高太鼓の練習（浦町）



108. 夜高節の練習（浦町）

## ⑤ エンリヨ

親、配偶者、同居の親族などが死亡した場合、エンリヨとなる。エンリヨとなると、一年間は夜高行事に携わることが大きく制限される。行燈には触れず、製作に加われないうえ、製作の場へ足を踏み入れることもエンリヨする。また、法被を着ない、福野神明社の社殿へは近づかない、鳥居はくぐらない、夜高行事のポスターを家の前に貼らないなどの制限がある。万事目立つことは控えるようにする。

## ⑥ 夜高行燈の練り廻し

### 出陣式

出陣式は浦町会館の近く、仲村歯科医院前で行われる(写真111)。行燈を挟んで氏子が二列に整列する。裁許三人が行燈の前に並び、それぞれの提灯を地面に置く。その前には二本の酒が置かれている。裁許長が挨拶する。行燈の二か所(横棒一本目の左右、台の上下四か所、九



109. 夜高装束(浦町)



110. 提灯(浦町)



111. 出陣式(浦町)



112. 行燈の練り廻し(浦町)

本目の左右)に塩を三角に盛る。それに二人の若衆(昨年と今年の頭)が一升瓶の酒を注ぐ。その後、裁許長が一升瓶を直で飲み、他の裁許の二人に回す。その後整列している氏子に順次回す。出陣式が終了すると行燈に向かって今年頭、その後ろに副頭が並び、二人とも一度しゃがんで「ノーノ」の掛け声とともに拍子木をたたき、行燈を出す。

### 練り廻しの形態

先頭に裁許長を真ん中にした三人の裁許が横に並び、若衆副頭、頭の順と続く。行燈の左右には昨年の頭と副頭がつく。若衆頭は、常に行燈に向かい進行方向を背にしている。そのため副頭が行燈の前後左右を移動して状況を確認し、若衆頭に情報を伝える。若衆頭は副頭の情報に基づき、拍子木を叩いて大声で夜高節をリードする(写真112)。

行燈の人員配置は次のようである。まず前の横棒に四人、肩の高さ



が一定になるような背の高さが同じような四人が並ぶ。左右にそれぞれ五〜六人がつく。後方の横棒には五人。左右に拍子木を持った若頭がそれぞれ一人ずつつく。頭が歌い始める夜高節の歌詞を後方の若衆へ伝達するため、常に前と後ろを走り回る。台の上には、前に二人、後ろに一人が拍子木を打つ。山車の上にも前後に一人ずつ登っている。電柱にぶつからないように、電線を引っかけないように、山車の方向を変えたり、傾けたりする。これらは若衆に入って二〜三年の若者が担当する。行燈の最後部には二人が座って乗り、重りの役を担う。

#### 辰巳町との出会い

出陣式を終えると七町の集合場所である四つ角へ向かうが、その前に浦町の行燈は、辰巳町との町境の三叉路で辰巳町が行燈と出会い、二町がそろって四つ角へ向かうことになっている。浦町と辰巳町が行燈が三叉路に到着すると、それぞれの町の裁許三人がそれぞれの提灯を地面に置き、辰巳町の裁許が浦町の裁許の前に来て挨拶をする。挨拶をするときは提灯を持ち上げる。挨拶が終了すると、辰巳町が行燈が先導して四つ角へ向かう。四つ角へ到着すると当番裁許の挨拶を受ける。他町がそろうまで所定の位置で待機する。

#### 宮参り

当番町の案内により四つ角を出発して宮へ向かう。

三人の裁許が鳥居の前に並んで整列する（写真113）。後方に行燈が位置し、行燈の左右に氏子が整列する。裁許三人は鳥居をくぐって橋を渡り、手にしていた提灯を各自の前に置く。裁許の後ろに並んだ若衆二人が一升瓶をそれぞれ一本ずつ持って出て裁許の前に置く。続いて若衆二人はそれぞれの一升瓶の栓を抜き、裁許前の地面に酒で線を引き。裁許三人が二礼二拍手一礼し、同時に後ろに並んだ氏子たちも二礼二拍



113. 宮参り（浦町）



114. 七津屋との引き合い（浦町）

手一礼する。その後裁許三人は橋を渡って戻り、回れ右をして（宮を背にして）行燈の方を向き、若衆から渡された一升瓶を口にしてそのまま呑む。裁許長から順に副裁許長二人が呑んだ後、行燈の左右に並ぶ他の氏子も順に一升瓶から酒を呑む。

終了すると、浦町若頭の「出すぞー」との掛け声のあと、それまで待機していた辰巳町が行燈が出発する。辰巳町が行燈に続いて浦町行燈も方向転換して宮を出る。

#### 行燈の練り廻しルート

令和六年（二〇二四）の練り廻しルート図

宮の参道を出ると右へ折れて横町通りを進む。にわ呉服店で引き返し、横町通りを四つ角方向へ戻る。四つ角で右折し、旧森田書店で左折して新町通りを進む。石田電機の踏切で折り返し新町通りを戻り、次に上町通り、七津屋通りを進む。踏切手前の旧河合たばこ店で左折、砺波

信用金庫前を通過して再び上町通りで右折して所定の場所へ向かう。

#### 待機場所

裁許が裁許会、安全確認をしている間、行燈はファッションサロン  
ありかわ（旧有川呉服店）の横、イノハラスポーツ前に止まり、車輪を  
はずしてとどまる。若衆は円陣を描いて座り、一升瓶を回し飲みし、拍  
子木を打ちならし大声で夜高節を唄う。令和七年には昨年結婚した若衆  
に酒を頭から浴びせるといふ温かい祝福が行われ、非常に盛り上がり上  
がっていた。

#### 引き合い

安全確認終了後、引き合いが始まる（写真114）。そのため的事前  
準備をする。行燈の上に乗っている人の命綱の確認を行い、行燈前面に  
下げられている紅白の房や提灯をはずす。紅白を内側へ入れてしっかり  
縛る。相手方に引つ張られて、取られないよう、破られないようにする  
ためである。提灯は壊されることを避けるため、近くの家に預けること  
がある。その場合は翌日にお礼（酒一升など）をする。

引き合いは、辰巳町・浦町・横町の行燈が自町方向（北向き）に停  
止している横を、自町方向（南方向）へ向かう上町・七津屋・新町が通  
り抜ける。すれ違いざまに、お互いの吊物や山車を壊し合う。

#### 再び練り廻し

引き合いが無事終了すると、車輪を入れて再び練り廻しに出発する。  
自町へ帰る前に御蔵町通りを入り福野中学校前で折り返し、田中町を入  
りN.T.T前で折り返し、辰巳町通りを入り広場（天理教教会前）で折  
り返し、そして浦町通りを柴田医院を過ぎて折り返す。

そのまま解体場所である円成寺前の広場（駐車場）へ向かう。

その間、一足先に戻っている太鼓隊は最後の名残に浦町会館前で自

由気ままに思いっきり太鼓をたたいている。

#### シャンシャン（辰巳町との）

浦町通りと辰巳町通りの三叉路でそれぞれの町の裁許三人が対面し  
て並ぶ（写真115）。その前には酒二本。両町の若衆が酒で円を描く。  
湯のみ茶碗を若衆の一人が裁許に渡し、酒を注ぐ。浦町裁許長が挨拶し  
たあと辰巳町裁許長も挨拶をする。その後そろって酒をのむ。拍子木で  
シャンシャンをし、終了となる。それぞれの町へ帰る。

#### ⑦夜高行燈の解体

シャンシャンに参加しない人たちが行燈の解体を行う（写真116）。  
シャンシャンが終わって裁許が帰ってくるまでに、行燈をおおまかに片  
付け、道路も掃除しておく。

車輪をぬいでバッテリーを取り出し、河原電機へ渡す。吊物、山車（御  
所車）、田楽、心木などをはずし、行燈小屋へ運び込み所定の場所へ納



115. 当番裁許シャンシャン（浦町）



116. 行燈の解体（浦町）

める。台の縄、ワイヤーをはずし解体して円成寺床下へ納める。これらの作業は次々と手際よく行われる。

解体後、浦町会館で慰労会を行う。若衆の担当者が盛り皿、酒などの用意をし、裁許等が戻ってきたら、慰労会を始める。区長、町内の年配者、OBが次々に解散する中、若衆が最後まで残る。

#### ⑧チビ・小・中行燈

大行燈は高校生以上の大人、中行燈は中学生と小学生、小学校低学年の子たちや保育園児・幼児などは中行燈につないだ縄につながる。

以前は、大行燈の他チビ・小・中行燈の全四本の行燈を作っていたが、平成二七年（二〇一五）にチビ行燈をやめ、令和六年（二〇二四）から小行燈もやめることになり、大中の二本になった。少子化のためである。

浦町の狭い通りの中には、小行燈であれば練り廻せるが、中行燈では通るのが難しいところがある。令和六年は、中行燈で狭い通りを通れるように、これまで斜めに設置していた山車の宝船の宝を直立させた。浦町住民の寄付により行燈が製作できることから、練り廻しすることはお披露目の意味がある。できるだけ多くの通りを練り廻すことを目指している。

### 第五項 辰巳町

#### (一) 辰巳町の概要

辰巳町は、南砺市福野の北東部に位置し、現在の住居表示では福野および苗島の一部にあたり、行政区では五区に該当する。北は松原及び松原新、西は百町に接しており、夜高行事に関わる町では、西は浦町、南は御蔵町と接している。古くは下町新道と呼ばれ、文政六年（一八二三）には辰巳新道、明治二〇年（一八八七）には辰巳町と呼ばれていた。辰巳町は浦町の分家のような間柄であるため、夜高や曳山行事の運行で一部連携を図る部分がある。

令和六年一月の世帯数は八〇戸で、地区の大部分は住宅で、若干田がある。令和二年（二〇二〇）時の人口は昭和四五年（一九七〇）時の四三パーセントとなっており、上町、御蔵町に次いで三番目に少ない人口となっている。



117. 辰巳町会館



図 16. 辰巳町位置図

夜高行事運営の中心となる「辰巳町会館」（写真117）は、昭和五九年（一九八四）ころの建築で、二階建。行燈の製作が始まると一階は大行燈、二階は小行燈の製作に使われる。また、笛と太鼓の練習は福野中学校のピロティが使用される。行燈の保管は一階が使用される。辰巳町会館の建設以前は、尼寺のお堂を使用していた。

## （二）運営組織

夜高行事の運営は「辰巳町夜高保存会」、「辰巳町裁許」、「辰巳町若連中」が担う。

### ①辰巳町夜高保存会

#### 組織構成

辰巳町夜高保存会は、会長一人で組織されている。

辰巳町では、区長が保存会長を務めることになっているため、区長選考会によって保存会長が決まる。区長選考会は、七つある班の班長・新班長の計一四人と旧区長が集まって行われる。選考の主体となるのは新班長の七人であり、任命された新区長の受諾によって区長が決定する。任期は二年で、再任されることはほとんどない。

#### 役割

辰巳町夜高保存会は、夜高行燈の製作、練り廻しの運営と人員確保、保存が主体となっている。

夜高行事に関する役員の役割は次のとおりである。

#### 会長

会を代表して運営を総括する。

#### 運営経費

夜高行事運営の経費は、町内の負担金、福野夜高祭連絡協議会からの助成金などを財源としている。

令和七年（二〇二五）の運営経費では、収入は二二九万円となっている。

支出は行燈の製作費、慰労会などの飲食費、行事への保険料などで構成される。

#### 会合・スケジュール

辰巳町の夜高行事に関する会合は辰巳町会館で開催される。

まず、一月に、裁許選考会を開催し、裁許が決定される。二月には公聴会が開催され、前年の裁許と交代し、祭礼全般に関する予算内容等の発表をして承認を受ける。

### ②辰巳町裁許

辰巳町裁許は、夜高行燈の製作、練り廻しの責任者である。裁許長一人、裁許二人の三人で構成され、裁許選考会で決められる。以前は、任期は二年と決められていたが、人口減少の影響によって、現在では二年ないし三年に変更されている。任期は三人の裁許の話し合いによって決まる。身内に不幸があった場合は任期一年で解任されることがある。

昭和四九年（一九七四）までは裁許は二人であったが、翌年から三人になった。辰巳町以外に居住している人が裁許を務める場合もある。裁許になる資格というものはないが、若衆頭を経験していないと裁許にはなれない。裁許は祭りの期間中の動き、働きを見て選考される。

裁許会などでは辰巳町裁許は浦町裁許とともに動く。これは先述のとおり浦町の分家にあたるからで、浦町裁許の立場が上となっており、裁許同士の話し合いでは辰巳町裁許が意見を出しても通らない。裁許を務めあげると、若連中などから「裁許」と書かれた個人名の入った提灯が贈られる。

#### 裁許長

夜高行燈の製作、練り廻しの全般にわたる総責任者である。

### 裁許

裁許長の補佐を行う。

### ③辰巳町若連中

辰巳町若連中は、決められた日程に沿って行燈の製作を行い、行燈の曳き手を担当する。頭の命令に応じて、祭礼の準備と祭礼を円滑に進める。個人ごとの役割分担ではなく、その場で頭の命令に従う。若連中は高校卒業後に加入する二五歳前後までの者である。令和六年は一人前後となっているが、実際に活動しているのは五、六人である。若連中のリーダーは「ワカガシラ」「カシラ」と呼ばれ、一人が選ばれる。二五歳前後の年齢で務める。副頭も一人選ばれる。副頭は若頭よりも少し下の年齢から選ばれる。来年に頭をする人を副頭と呼び、頭の練習という意味もある。

若頭を務めている者が次の頭を指名して若頭になり、祭りの期間中の動き、働きを見て決める。

### 若頭

辰巳町若連中をまとめたり、裁許からの連絡を広めたりする。行燈製作の予算を立て、若連中の代表として、裁許とともに区長に承認を得る。行燈製作の日程表を作成したり、台締めや行燈作成などの際に若連中の人々へ即興的に指示を出したりする。

### (三) 行事の現状

#### ①夜高行燈の製作

#### 製作工程

製作は公聴会後に作り始めることになっているが、実際それ以前から開始されている。製作は若連中が中心となるが、保存会OBも手伝う。

田楽と傘鉾の組み立ては四月上旬に行われる。

田楽には電灯ではなく蝋燭が入っており、左右とも足場が取り付けられている。他町の田楽は足場が片方しか取り付けられていないものがある。田楽や裁許が持つ提灯の火は、福野神明社の献燈式から貰って来た火を使う。移してきた火はランタンに入れて置き、そこから提灯などに移す。

吊物の裏側は、以前は蝋燭に火を着けるために大きな穴を開けていたが、現在は電灯の配線を通すための小さな穴が開いている。裏側には若衆頭の名前が書かれている。傘鉾は正面を向くよう配置する。

### 竹細工

竹は修理箇所を確認し、破損の度合いによって必要数量を決める(写真118)。行燈に使用される竹は、曲げやすいマダケである。以前は安居寺から竹をもらってきたが、現在では、雅環境造形から購入し



118. 竹細工 (辰巳町)



119. 配線 (辰巳町)

ている。

### 配線

配線は、電球の交換や配線の位置変更などを行う（写真119）。その際は極性の確認を必ず行い、電灯にはショート対策のため赤色の絶縁テープを巻く。

電球をLEDに変更するにあたっては一年ほどかけ、どのLEDにするか、何種類か検討した結果のものになっている。そのための予算も組み、メーカーとも相談しながら選んだ。

LED化するとバッテリーの数も少なくて済むため、行燈全体の重量は軽くなるという利点もある。しかし、土台となる台部分の重量が軽くなり、行燈自体が倒れやすくなる懸念が出てきたので、バランスをとるために砂を入れた袋を置くなど対策を講じている。

LED電球の配置は、まだ試行錯誤の段階であり、現在でもどのように見えるか、どのような明るさが良いかなど検討しながらやっている。

### 紙貼り

紙は下から順に粹ごとに貼る。上から下に貼ると全体に剥がれていくため、それを防止するためである。紙の表裏を確認して狭い箇所や手の入りにくい箇所から貼る。和紙を切るときは水筆で水を塗って切り、余り部分は竹の裏に折り込むようにする。行燈用の和紙は、道の駅たいら五箇山和紙の里で購入している。以前は高岡市にある三村半七商店で購入していた。さらにそれ以前は福野横町にある岡田表具店で購入していた。

田楽用の大奉書は、行燈用の和紙と同じところから購入している。ただ近年、田楽に貼られる大奉書がビニールシートによって保護されるようになってからは購入しなくなっている。

### 蠟引き

紙には型紙を使って模様を描く（写真120）。これまで作られた型紙があるため、それらを用いて描く。型紙は会館のファイルに入っている。

蠟引きをしているときに後ろを通るとミスが誘発することがある。で、一声かけるなど注意が必要である。蠟について、木蠟は時間経過とともに茶色になり、筆が重くなる。パラフィンは色が変わらず、サラサラに近いものであるがカスレが出やすい。花びらを描く時には木蠟の方が良いという。花を描く時には筆の強弱で立体感を出し、さらに紅入れをする時に水でぼかしていくと濃淡が出来て立体感が出るという。蜜蠟も使うことがあり、小行燈に使っている。蠟は以前から、木澤薬局が問屋に発注したものを購入している。

### 紅入れ



120. 蠟引き（辰巳町）



121. 紅入れ（辰巳町）

紅入れをする際には黄色、桃色、青、赤の順で入れる（写真121）。赤は最後に入れる。赤が引き立つので、赤をうまく塗れるようにする。山車などは下から見てきれいに見えるように色を塗る。上部は適当でも観客からは見えにくいので、下の部分は見えるのできれいに塗る。

小行燈の紅入れは、四月中旬頃に親子を集めて行っている。染料は以前から、木澤薬局が問屋に発注したものを購入している。

#### 台締め

四月中旬に台棒を恩光寺から一旦花島精肉店付近に出す。同日、縄巻きがある。縄巻き後の縄の塊はナワコロやコロと呼ばれる（写真122）。縄の太さに違いがあり、コロにはビニールテープで印を付けている。化粧縄の縄は細いもので、固定の為とされている縄は少し太いものとなる。縄を購入するのはおくら商店からであるが、かつては鷹屋商店であった。

四月下旬、台や台棒や縄のほか、番線カッターなどの道具を福野中学校のピロティに運び出し、「お清めの儀」を行う。

四月二八日に台締めを行う。台締めは中学校のピロティで行う。

一三時ごろから皆が集まって台締めのための準備を行うが、若連中はそれよりも早く出てきて準備のための準備を行う。台棒を恩光寺から運び出したりするほか、軍手、鎌、木槌、番線や番線カッターなどの工具や飲み物などを準備する。辰巳町の台棒は鉄の輪で締めてある。台棒は平たい方を下部にした方が固定しやすいため、年によって入れ替わったり、向きを変えたりしており、年号と番号が書かれている。

一九時から台締めが始まり、各戸から人が出てくる。この時間からは「辰巳町」と入った提灯を出し、ピロティの出入り口に立てている。付近に若連中が立ち、来た人々に軍手を渡す。

また、小行燈の台締めも行われる。大行燈は若連中を中心に比較的若い年齢の者が、年上の指導を受けながら行う。若連中は記録のため、静止画や動画を撮影している。小行燈は六〇代以上の者によって行われる。

台棒は番線とワイヤーや金具で固定されており、それらを更に縄で縛りあげる（写真123）。番線や金具を隠すようにして縄を巻く。台の本体部分に付けられた金具には草鞋を使う。縄を巻く際に縄と縄の間を通すのに衣服用のハンガーを加工した「ハンガー」と呼ばれるものを使っている。引き合いは進行方向右側がすれ違う側面になるため、右側を頑丈に巻く。番線や金具で固定しているため、縄は化粧である。

台締めが終わると台の先に提灯を付け、仮設格納庫に持ち運ばれる。現在は、辰巳町会館へ入る交差点付近の土地に仮設小屋が建てられる。足場が組まれた小屋で、行燈の修理などもしやすいようにしている。



122. 縄巻き（辰巳町）



123. 台締め（辰巳町）

二一時ごろに台締めが終わると辰巳町会館の二階に集まる。公聴会と違い、床の間に向かって右側の出入り口に近いところに裁許の三人と若衆頭が並んで座る。床の間側の席には区の三役が座るほか、年齢の高い者が座る。裁許長と若衆頭から挨拶があり、乾杯する。その後、オーダブルを食べつつ、酒を飲む。

#### 飾付、組立

五月一日、五時台から準備が始まり、六時から行燈を組み立てる（写真124・125）。組立にはクレーンを使用する。心木を立て、その後、田楽、傘鉾、山車と入れていく。吊物は後からつける。

心木には「正面」と書かれているが、実際に組み立てるとその年によって、山車や傘鉾が正面を向かないような不具合があるため、慎重に入れられる。心木は立てた後に金具を取り付けて固定する。台の上と中で固定する。上につけた金具に田楽を載せるような形になる。



124. 行燈の飾付（辰巳町）



125. 行燈の組立（辰巳町）

組み立てが終わると天候によっては仮設格納庫へ入れられる。ここで吊物が付けられ、その他微調整を行い、作業が昼頃までかかる場合もある。

小行燈も仮設の小屋へ入れられる。

#### 製作の予算

令和七年（二〇二五）の製作費は一三三万円であった。

#### ②夜高行燈の意匠

#### 夜高行燈のデザイン

大行燈は、正面の吊物に分銅と天下泰平と書かれた軍配、後ろの吊物に巾着と打出の小槌と反物と大判小判が飾られる（写真126）。山車は、珊瑚、千両箱、大判、小判、鯛、米俵、小槌を乗せた宝船で、宝船の正面には紅白の布が垂らされる。二日目の練り廻し時には、紅白の布と小槌は取り外される。



126. 行燈の意匠（辰巳町）

小行燈は、正面の吊物にチンタマーニ、後ろの吊物に松竹梅が飾られる。山車は大黒天を取り付ける。

### ③夜高太鼓、笛、夜高節

練習は福野中学校のピロティで行われる(写真127)。四月中旬から二週間ほど日曜を除いて、競演会のある四月二十九日の午前中まで練習がある。二九日以外は、夜に練習を行っている。裁許OBが太鼓の世話方として二人ほど付き、太鼓の指導者が子どもたちに太鼓を教える。本来は練習時に裁許がいることが望ましいが、近年はそれが難しいため、裁許OBが世話方として付いている。

子ども太鼓が辰巳町の町を巡る行事が行われる。令和七年(二〇二五)のスケジュールでは、一日は、一四時三〇分から一六時にかけて七・六・五・四班をまわり(三六軒)、二日には、一五時から、一六時三〇分にかけて三・二・一(二三軒)をまわった。家に不在の場合は子ども太鼓を披露しない。

子ども太鼓は、初めに子ども太鼓の責任者が町内のお宅に訪問して、子ども太鼓を披露することを伝え、その家の前で太鼓を叩く子ども二人が「気をつけ礼、お願いします」と言い、一礼してから子ども太鼓が行われる。太鼓を叩き終えたのちに祝儀を受け取る。例外として、太鼓の先生の家のみ、揃え打ちと呼ばれている太鼓二台での子ども太鼓が行われる。貰った祝儀は子どもたちのお菓子などの経費にもなるが、太鼓の修理代などの維持費のために積立てられている。

笛は、女子がする割合が高い。太鼓と息を合わせて演奏するため、本当は笛をしてから太鼓を練習する方が上達しやすいといわれているが、実際は太鼓をしてから笛の練習に取り掛かることが多い。太鼓は小学校に入ってから練習を始め、笛をやりたい人は早くて小学校高学年になっ

てから練習を始める。

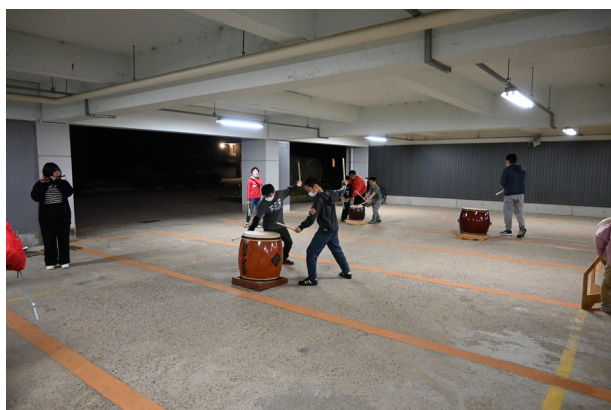
笛は、昔から高岡市福岡町にある新月乃笛というメーカーに、昔からの音程と同じものを作ってもらっていた。しかし現在では、大國屋から新月乃笛の祭用の笛を買うようになったため、昔の笛の音と違いが生じている。

笛の所有については、個人で買う人と辰巳町にある笛を使う人に分かれる。

夜高節は、上りの曲、下りの曲、町流しの曲、喧嘩の曲に分けられる。それぞれ歌詞と曲調が全く違う。夜高節の練習などはとくに行われていない。

### 子供夜高太鼓競演会

令和七年(二〇二五)の子供夜高太鼓競演会は、四月二十九日の一三時からア・ミューホールにて行われた。辰巳町からの参加者は、小学校



127. 夜高太鼓の練習(辰巳町)



128. 裁許の夜高装束(辰巳町)

低学年の部に二組、高学年の部に二組、中学生の部に二組、揃え打ちの部門に二組で構成されていた。これらは参加者の兼任によって構成されたものであり、小・中学生の参加は合計で九人であった。競演会の結果、賞の獲得はなかった。子供太鼓競演会の笛は、福野夜高太鼓保存会に任せている。

#### ④夜高行燈の装束

若連中、裁許とも、股引、腹掛け、長い地下足袋に法被を着用する（写真128）。法被は、柄の入った腰巻きで締め付ける。若連中のなかで、鯉口シャツや鉢巻きを付けたい人は着用する。

辰巳町の法被は紺色であり、背紋に白抜きの辰巳町のマークが染め抜かれている。腰柄には、辰の絵と辰巳町の巳が書かれている。裁許・若連中・頭・小若連の計四種の法被があり、法被のデザインには多少の違いがある。違いがあるのは主に両襟部と左袖部である。裁許の法被は、右襟部に二本の横線に辰巳町、左襟部に二本の横線と裁許と書かれている。若連中の法被は、前面の両襟部に辰巳町と書かれている。頭の法被は、右襟部に辰巳町、左襟部に頭若連中と書かれている。右袖部には白色の線が入る。

小若連の法被は子どもが着る法被であり、背面のデザインが異なっている。この法被は紺色であり、背紋に赤で祭と書いてある。腰柄には、辰の絵と辰巳町の巳が書かれていて、右袖部に辰巳町、左袖部に小若連と書かれている。基本的にこの法被は、現在では廃止されている。

裁許は昼間でも提灯を持つ。提灯は「浦町辰巳町山車裁許」と書かれた提灯と「辰巳町裁許」と書かれた提灯の二種類がある（写真129）。それら裁許と山車裁許の提灯の背面には浦町と同様に御幣が描かれている。

若頭は拍子木を持つ。

#### ⑤エンリヨ

親族に死者が出ると祭りに参加しない。一年は参加しない。

しかし、全く参加しないという訳ではなく、行燈に触らないようなところで参加することがある。辰巳町のロゴが入ったジャンパーを着て、警備をするなどのような形で参加する。

令和六年（二〇二四）は、令和五年の裁許長がエンリヨとなっていたが、警備で一部を手伝っていた。

#### ⑥夜高行燈の練り廻し

##### 行燈の練り廻しルート

五月一日のルートでは、辰巳町を出て四つ角に向かう。四つ角で待機したのちに宮参りに行くために横町に入る。宮参りと横町の練り廻しが終わったのち四つ角へ戻る。四つ角から上町通りを通過して新町通りに入る。



129. 提灯（辰巳町）



130. 出陣式（辰巳町）

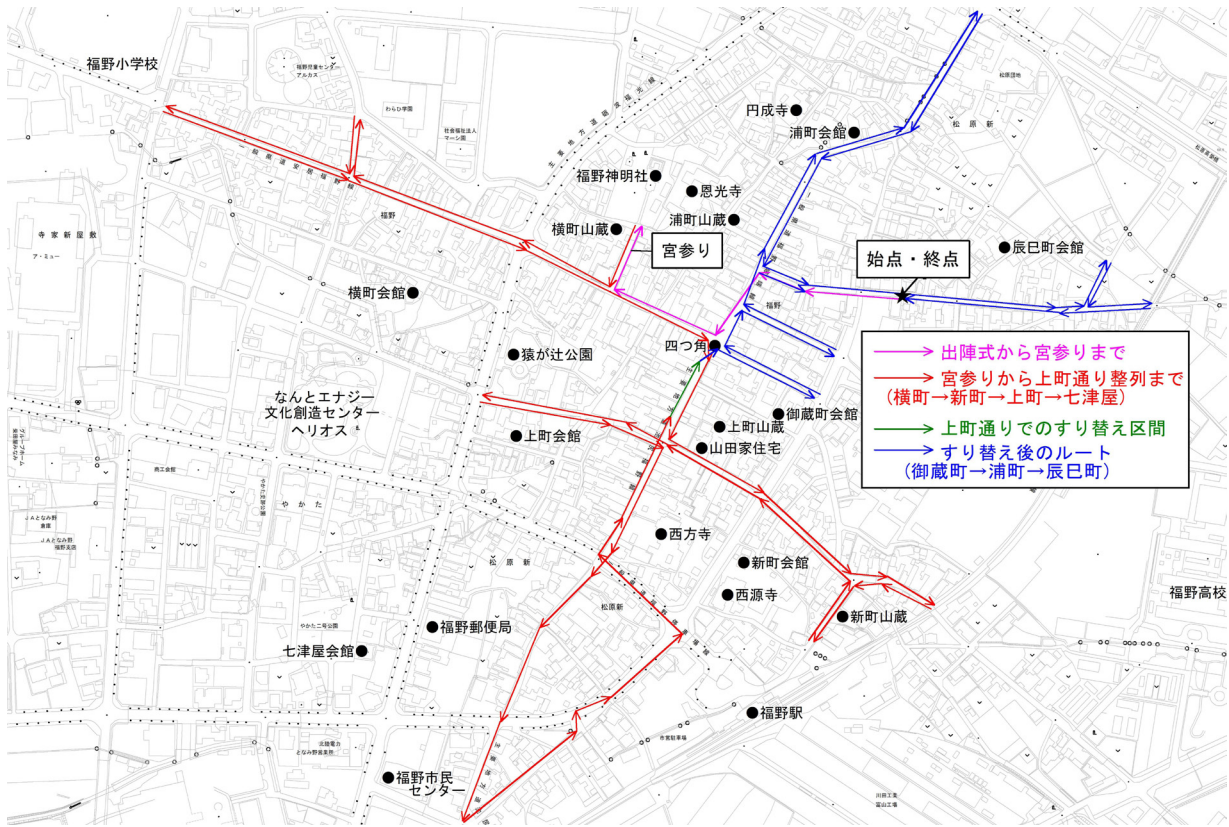


図 17. 辰巳町行燈練り廻しルート 1 日目

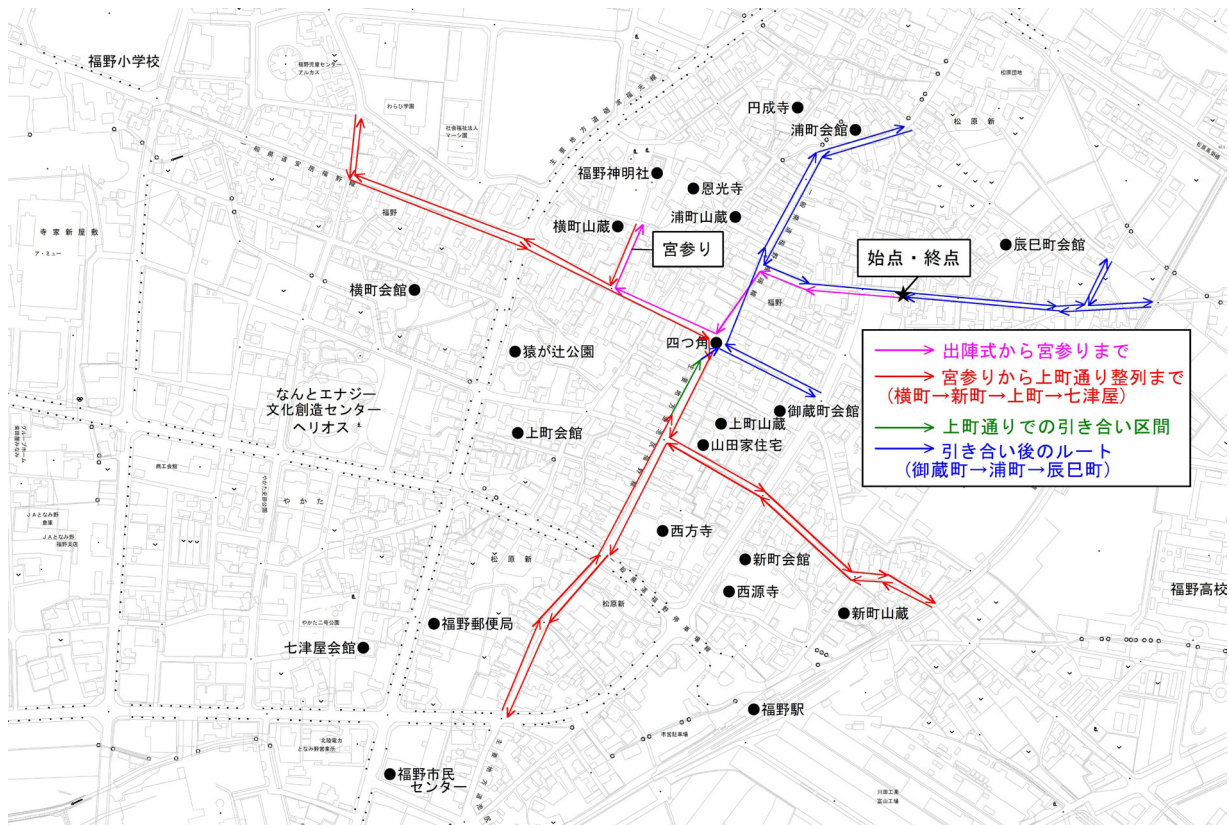


図 18. 辰巳町行燈練り廻しルート 2 日目

る福野駅方面に練り廻しをしたのち行燈を切り返し、上町に入り猿ヶ辻公園まで行く。上町通りに戻り、七津屋通りを福光方面に進み、福野駅前の交差点を経由して上町通りを四つ角方面へ戻る。浦町方面に進み、御蔵町と田中町の練り廻しを終えて浦町に入る。浦町の練り廻しを終えたのちに辰巳町の町内曳きがはじまり、練り廻しを終える。

五月二日のルートは引き合いに時間がかかるため、一日のルートの短縮版で練り廻しを行う。そのため、辰巳町以外の町内の練り廻しの一部短縮ルートで練り廻す。浦町、田中町については、練り廻しを行わない。

辰巳町内を巡行する時道幅が狭く行燈が入っていくことができない道では、その道に向かって、一曲歌う。行燈の車輪が線路を進めないため、線路の先の辰巳町内の家に向かって一曲歌う。辰巳町内には行燈が進めない箇所が七か所ある。

シャンシャンが始まるまでに行燈の練り廻しは終える。

### 令和七年（二〇二五）の練り廻し

五月一日

- 一八時一五分、出陣式を終えて出発する
- 一八時二〇分、辰巳町裁許が浦町裁許と挨拶して合流する。
- 一八時三五分、辰巳町小行燈が四つ角から出発する。
- 一九時三五分、辰巳町大行燈が四つ角から出発する。
- 一九時四〇分、横町にて横町とすれ違いを行う。
- 一九時四五分、福野神明社に宮参りをする。
- 二〇時二〇分、横町の端まで練り廻し四つ角へ引き返す。
- 二〇時三〇分、上町・七ツ屋と横町にてすれ違いを行う。
- 二〇時四〇分、横町の子供行燈と横町にてすれ違いを行う。
- 二一時二〇分、新町の端まで練り廻し、上町の方向へ向かう。



131. 行燈の練り廻し（辰巳町）



132. 宮参り（辰巳町）

- 二二時三〇分、猿が辻公園にて引き返す。
- 二二時四〇分、七津屋の端を引き返し福野駅方向へ向かう。
- 二二時五〇分、御蔵町を通すために、ふじなが時計金属店前にて待機する。

- 二二時一五分、スタジオ栄光社横にて待機する。
- 二三時一〇分、スタジオ栄光社横にて上町とすれ違いを行う。
- 二三時一五分、スタジオ栄光社横にて七津屋・新町とすれ違いを行う、上町通りから出発する。

- 二三時三〇分、御蔵町の端にて引き返し、出発する。
- 二三時四〇分、田中町引き返し、辰巳町へ向かう。
- 二三時五〇分、国道四七一号にて浦町を引き返す。
- 二四時〇五分、相撲茶屋チャニコ亭前にて浦町とすれ違いを行う。
- 二四時四〇分、辰巳町練り廻し終了。

五月二日

- 一八時一〇分、出陣式を終えて出発する。
- 一八時一八分、辰巳町裁許が浦町裁許と挨拶して合流する。
- 一八時二〇分、大行燈四つ角に到着。
- 一八時五〇分、辰巳町小行燈が四つ角から出発する。
- 二〇時〇〇分、辰巳町大行燈が四つ角から出発する。
- 二〇時二〇分、福野神明社に宮参りをする。
- 二〇時五〇分、横町の端まで練り廻し、四つ角へ引き返す。
- 二二時二〇分、新町の端まで練り廻し、上町通りに引き返す。
- 二二時三〇分、七津屋にて横町とすれ違いを行う。
- 二二時三五分、ビジネスホテル村上前で四つ角方面に引き返す。
- 二二時四五分、七津屋通りにて御蔵町とすれ違いを行う。
- 二二時二五分、上町通りにて待機する。
- 二三時三五分、上町通りにて引き合い開始する。
- 二四時一〇分、御蔵町の端にて引き返す。
- 二四時三〇分、浦町との別れの挨拶をして解散する。
- 一時〇〇分、辰巳町練り廻し終了。

### 出陣式

大行燈の前に、裁許長を真ん中に裁許が三人並ぶ。その後ろに若頭と副頭、三、四列目に若連中、若連中の後ろにはその他の参加者が一列に五人くらいで並ぶ。裁許長の前には酒一升瓶が置かれる。並ぶと裁許の一人が司会になり、出陣式が始まる。司会が大声で進行し、出陣式を行う（写真130）。

まず、裁許長が一升瓶を持って行燈の台棒の四か所、台の摺木の前

後四か所に酒をかけ、その後、全員で二礼二拍手一礼する。終わると若頭が参列者に「どうぞ」と言いながら酒を注いで回り、一斉に乾杯をする。宮参りで乾杯する際も同様である。裁許、若連中に注ぎ、最後に頭が若連中の人から盃を受け取り、裁許長の掛け声で乾杯をする。乾杯するとき、裁許は皆の方を振り向いて行う。その後、裁許長の挨拶があり、それが終わると行燈に向かって一礼して式が終了し、出発となる。

浦町と辰巳町の境界である三叉路で浦町の行燈が来るのを待つ。その時は裁許の三人が提灯を前に置き、立って待つ。浦町の行燈が到着すると辰巳町裁許が浦町裁許と言葉を交わし、辰巳町の行燈が出発する。辰巳町は分家という立場のため、浦町の行燈に先立って出発する。出発後は四つ角で待機となる。

行燈の前に太鼓と笛が先導する。

### 練り廻しの形態

行燈を引き出す際には、裁許が行燈に向かって出発するという意味の合図で提灯を掲げる。ついで頭が「出すぞ」「山車いいか」と声を上げ出発の確認をとる。それに対して若連中が「はい」と返事を返したのち、「ノーノ」という掛け声と共に拍子木が鳴らされ、囃子が始まり、練り廻しを開始する（写真131）。

練り廻し中の様子をみると、まず提灯を持った裁許三人が先頭を歩き、行燈と裁許の間には、拍子木を持った頭と副頭がつく。副頭は来年頭をするための練習という意味があり、頭と若連中の連絡をする役割があるため、頭の前で拍子木を叩く。練り廻し中に頭は夜高節のリズムに合わせて拍子木を叩きながら安全に練り廻すための指示を出す。拍子木のリズムは行燈の進むスピードを調整している。

行燈の台の上には、副頭とは別に、拍子木を持った人が三人乗る。基

本的に前方に二人、後方に一人が配置され、それぞれの持ち場を動き回りながら、安全確認や行燈の角度調整を行う。また拍子木を叩きながら歌うことも役割の一つである。前方の台の上の人が歌うと、四隅で安全確認を行う若連中を介して、その歌が行燈の後方にいる若連中へつながる。

その他、山車の上部には二人以上の電線係が乗り込み、行燈にかからないように電線を持ち上げて練り廻しを補助している。

裁許は基本的に行燈から離れない。若連中や裁許OBなどが他の行燈などの動きを見聞きして、裁許に伝える。行燈から離れる場合は、行燈同士がすれ違う時、相手先の裁許のところへ行き、その旨を説明するときや、練り廻し中の事故が起きた時に当番裁許へ報告しに行くときである。

なお、辰巳町の行燈の後ろには本家の間柄である浦町の行燈が練り廻される。

#### 宮参り

福野神明社に着くと裁許の三人は鳥居の前で並ぶ。その後ろには若衆が並ぶ（写真132）、その他は整列しない。裁許長は台部分に酒を注ぐ。

二人ずつ五組の若衆が駆け足で参道に等間隔で並び、提灯を掲げる。その間を若衆頭が酒一升瓶を持って、拝殿まで走って持っていく。戻ってきた若衆頭が鳥居の下に置かれた一升瓶の封を開け、その酒で鳥居の下に「の」の字を書く。

裁許長に合わせて、皆で二礼二拍手一礼を行い、その後、乾杯をする。乾杯にあたっては若連中が酒を注いでまわる。乾杯が終わると、行燈は横町の山蔵前に動かし、浦町の宮参りを待ち、行燈が動けるようになる

まで待つ。

#### 休憩場所

休憩場所は決まっていない。ただ行燈の練り廻しをスムーズに行えるように待機する時間が自然と休憩時間となる。行燈が待機する機会としては、四つ角をはじめとして、福野神明社で浦町が宮参りしている間、横町で他の行燈とすれ違う時、上町通り、新町通りで浦町を待つ時、七津屋での待機時間、引き合い前の待機時間が挙げられる。

引き合いまでの待ち時間などに若連中が、中心に提灯を置いて、拍子木を持って、円形に座ることを円陣という。円陣では夜高節を歌いながら、一升瓶の酒を回し飲みする。盛り上がってくると、提灯を持って歌ったり、二人で肩を組んで歌いながら円陣の中をステップしたり、一升瓶の酒を振りまき散らしたりする。

円陣を組むのは上町通りである。ここでは行燈同士のすれ違いや引き合いを行うための安全確認や配置の決定で時間がかかる。その時間に気持ちを高めるといふ意味も含めて円陣が行われる。その時に行燈の後ろで円陣をしてしまうと浦町の陣地で円陣を組むことになってしまうため、必ず辰巳町の行燈の前で円陣が行われる。なお、円陣は雨天の場合でも関係なく行われる。

#### 引き合い

四つ角においての引き合いの相手は、上りである上町・七津屋・新町となっている（写真133）。辰巳町は浦町・横町とともに停止して上りの三町の行燈を待つ。通り抜ける際に引き合いが始まり、主に行燈の吊物や山車を壊しあう。引き合いの参加者にケガ人が出た場合は、治療の手当てや、場合によっては救急車の出動要請など自町で速やかに対処する。ケガ人が出た時の対処は裁許会で事前に伝達されている。辰巳

町のお酒を飲んでいない人が車で病院に送ることが基本とされている。一日目は特にけしかけたりしない。二日目は壊し合う。行燈が壊れた方が良くとされる。

### シャンシャン

五月三日の深夜一時三〇分〜二時頃にシャンシャンを行う（写真134）。四つ角の北側、浦町・辰巳町を背にして裁許が並ぶ。その際本家である浦町の隣に並ぶ。辰巳町では裁許三人が参加する。当番裁許の音頭により全員で手打ちを行う。

全体のシャンシャンの他に、浦町辰巳町のシャンシャンがある。その年の裁許によって実施するかしないかが決められる。

令和六年（二〇二四）は全体のシャンシャンが終了後、浦町辰巳町のシャンシャンが実施された。全体のシャンシャンの祭壇をそのまま、浦町と辰巳町の境界の三叉路の中心に置き、祭壇の準備が行われる。その後、浦町側に浦町裁許、辰巳町側に辰巳町裁許、四つ角側に若連中が立つ。全体のシャンシャン同様、浦町辰巳町の若衆頭が祭壇の周囲に楕円形になるように酒で線を引く。その後、若衆頭が酒を副頭と若連中が茶碗とスルメを甘く味付けしたものを配る。先に茶碗が配られ、酒を注がれ、裁許はそれを飲み、配られたスルメを食べる。その後、浦町の裁許長、辰巳町の裁許長の言葉があり、手締めがあり終了となる。

シャンシャンが行われていると同時に並行で行燈の解体が行われる。

### ⑦夜高行燈の解体

練り廻しを終えた行燈は、花島精肉店本店附近にて解体が行われる（写真135）。まず行燈の車輪を外し、行燈の電気を消す。横棒が固定されている縄を鎌で取り外す。レッカーが到着し、山車を外すための準備と同時に並行で台棒から横棒が取り外される。吊物はずし、山車の帆

の部分と船を外し、傘鉾、田楽、心木、台棒の順番で取り外す。台棒と心木は恩光寺で保管するために運び出され、その他は辰巳町会館で保管するために運び出される。

### ⑧チビ・小・中行燈

小行燈は吊物が田楽の上に配置され、田楽が見えるようになっていく。これは昔の行燈を意識して作っている。近年までは小学一年生から四年生が練り廻す小行燈と小学五年生から中学生が練り廻す中行燈の練り廻しがあった。ところが少子化の影響により、現在では小行燈のみが残っている。練り廻し時には、行燈に長年関わった裁許OBなどが子どもたちの安全を確保するために行燈につく。

五月一日・二日の日中に、小行燈の展示が辰巳町内で行われる。展示される場所は主に決まっていない。いつ移動させるか、どこに展示させるかは、毎年の頭が決める。展示を行うのは行燈が入っていない町



133. 上町との引き合い（辰巳町）



134. シャンシャン（辰巳町）

内の場所にも平等に行燈をみせる意味があるため、大体は行燈が入ることができない町内の五か所で展示される。

### ◎その他

夜高祭終了後、慰労会として「山行き」が開催される。以前は安居山へ行っており、子どもと大人は別々に開催されていたが、現在は大人と子どもが一緒になってバーベキューなどを行う。山行きの日程は掲示板に貼り出される。

町内には掲示板が辰巳町会館前、花島精肉店付近、辰巳町会館に入る交差点付近、天理教会付近の四カ所あり、行事のお知らせ（公聴会、台締めなど）を掲示する。子ども夜高太鼓競演会で受賞した場合は、賞状のコピーを掲示する。

辰巳町に行燈には砺波市鹿島から手伝いが来ている。となみ夜高祭の時に鹿島に行燈の足場を組みに行った際に関係を持った。鹿島から



135. 行燈の解体（辰巳町）



136. 祭り中に設置される田楽

手伝いがあった当初は鹿島から三人ほどしかいなかったが、令和七年（二〇二五）には一三人の手伝いがあった。鹿島からの手伝いの役割は曳き手であり、行燈の製作は一切させない。ただし、台締めの時には、化粧縄を巻く作業を手伝ってもらう。となみ夜高まつりの際には辰巳町から手伝いに行っている。

祭りの一日・二日の辰巳町内には、家の前など通り沿いに田楽が一二基設置される（写真136）。